

クララ・シューマン生誕 200 年

ロベルト・シューマンの妻、クララ・ヴィーク=シューマンは 1819 年 9 月 13 日、ライプツィヒで生まれました。優れたピアニストであり、作曲家としても活動しました。

ドイツの紙幣になるなど本国ではもちろん、日本でも原田光子の著書により古くから知られていました。(★は請求記号)



生い立ち

ピアニストで音楽教育家の父ヴィークはクララが生まれる前から音楽家に育てよう決めていた。5歳のとき両親が離婚、父により徹底した英才教育を受けた。9歳で公開の場所で演奏し、11歳でデビュー、パリなどヨーロッパの主要都市を演奏旅行でまわり、十代半ばにはヨーロッパ中で称賛を得た。ゲーテ、メンデルスゾーン、ショパン、パガニーニそしてシューマンらはその才能をほめたたえた。

妻として母として

ヴィーク家に住み込んで音楽修行をしていたロベルト・シューマンとは 1835 年愛しあうようになる。ロベルト 25 歳、クララ 16 歳、無名の音楽家と天才ピアニストとして世界を席巻していた娘の仲を知ったヴィークは狂乱状態となり、大反対した。二人は法廷に持ち込み、裁判を経て 40 年に結婚した。

結婚生活はクララには厳しいものとなった。ロベルトが作曲しているあいだは邪魔をしてはならず、家事と次々生まれた 8 人の子供の育児にも追われた。それでも演奏活動を続け、コペンハーゲンやロシアにも出かけている。しかしロベルトが精神を病み 1954 年ライン川から投身、このときは漁師に助けられたが、自ら療養所に入り、56 年に死去した。

この苦難の時期を支えたのがヨハネス・ブラームスだった。クララとブラームスは深く心で結ばれ、それはクララが没するまで続いた。

音楽家クララ

第一級のピアニストであったことは疑いの余地がない。ドイツでは進歩的なレパートリーで注目をあび、ショパン、シューマン、ブラームスの作品を数多く演奏した最初のピアニストだった。ヨーロッパ各地で頻りに演奏活動を行った。56 年夫の死の直前にイギリスへの最初の演奏旅行を行ったが、以後ほとんど毎年ロンドンを訪れた。64 年にはロシアを訪れ大成功をおさめ、夫ロベルトとブラームスの作品の普及に尽力した。

作曲家としても才能に恵まれ、室内楽曲や歌曲を中心に曲を残しているが、時代や生活の制約によってか、30代半ばで筆を折っている。

教育活動にも力を注ぎ、58歳のときにフランクフルトの音楽院の教授となった。夫の作品の全集楽譜や書簡集の刊行準備に携わり、書簡集は『若き日の手紙』と題して85年に出版された。

所蔵資料紹介♪

【図書】

『クララ・シューマン ヨハネス・ブラームス 友情の書簡』

B・リッツマン編 原田光子編訳 みすず書房 ★6.9-Sch86-13

20歳のブラームスがシューマン家を訪れた1853年からクララの死の直前1896年までに交わされた800通あまりの書簡から207通を精選した書。訳者は戦争中の昭和16年に『真実なる女性クララ・シューマン』を上梓し、クララを日本に紹介し、若くして亡くなった。長く絶版になっており、2013年に復刊された。

【楽譜】

『クララ・シューマン ピアノ曲集』

校訂・解説=森潤子 音楽之友社 ★CM-6265

11歳の頃作曲した作品1の「4つのポロネーズ」から、創作活動後期に書かれた「ロマンツェ・ロ短調」（作品番号なし）までのピアノ独奏曲13曲が編纂されている。作品番号順に並べられ、それぞれの曲が生まれた背景や貴重なエピソードが短いストーリーとして添えられており、楽譜と共に楽しめる。校訂・解説者の森潤子は、「ドイツ・ロマン派に生きた作曲家クララを知ることには、“無比の現象（M.プリオン）”であったロマン派の時代と芸術家たちに親しむことにもなりましょう」「芸術家クララの真摯な生き方は、時代や国を超えて私たち（音楽を志す少女たちも含めて、特に女性）に、励ましと希望を与えてくれるのではないのでしょうか」と述べている。

巻末には、*ピアノ独奏作品リストも掲載。

*ピアノ独奏作品の曲名については初版の楽譜に掲げられたもの、及び「新グローヴ音楽辞典」による。

【音源資料】

『クララ・シューマン 作品集』

マイケル・ポンティ(Pf) Berlin Symphony Orchestra ★R90.6

フォルカー・シュミット=ゲルテンバッハ指揮

クララの10代~30代に作られた曲が録音された作品集。

このレコードのメインは何とんでも「ピアノ協奏曲第1番」。

1836年にショパンの前で全曲演奏されたというこの作品、完成は3年前の1833年である。全楽章完成されたピアノ協奏曲は作品7のこの1曲のみだが、演奏される事が少なく聴ける機会も少ない。ピアノのメロディの中に、または和音のアルペジオの中に若い才能が弾け、女性ならではの美しい響きに出会える。

1853年までの作品が収録されている。

参考資料「クララ・シューマン」モニカ・シュテークマン著；玉川裕子訳/春秋社

★6.9-Sch86S-14

